

優秀賞

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「きょうだいとして生きる」

栃木県立那須拓陽高等学校3年 高沼千晶

私が医療、福祉に関心を持つようになったのは、知的障がいをもつ弟がきっかけです。私は小さい頃から弟のリハビリのため、言語聴覚センターや児童発達支援事業所に行き、弟と一緒にパズルや積み木で遊んでもらったり、絵本を読んでもらったりしていました。幼かった私はその経験を通して、弟が私たちのような健常者でないことをだんだんと理解していきました。時には弟のことを恨んだり、時には羨みながら障がいについて考えてきました。

私は小学生の頃、父も母も弟のことしか見えていない気がして、とにかく寂しかったです。そのため、児童発達支援事業所や支援クラスでのイベント、さまざまな集まりで障がいをもつ子どもたちが、お父さんやお母さんと楽しそうにしている姿を見て羨ましく思ったり、私にも障がいがあったらよかったのと思うこともありました。それでも、学校の同級生たちはみんな優しく、弟とも仲良く遊んでくれたので差別を感じたことは全くありませんでした。それは私にとつて嬉しかったことで、今でもみんなに感謝しています。

しかし、中学校に入ると、障がい者を馬鹿にするような生徒が現れ始めました。変な動きや声を出して障がい者の真似だと言ったり、支援クラスの子を馬鹿にして笑ったりするなど、理解のない残酷な行為を目の当たりにして私はその場に居づらくなりました。そして、小学生の頃のような寂しい、羨ましいという思いではなく、弟に対して関わりたくないでほしい、他人になりたいと思うようになりました。その頃、弟のことで私はよく笑われるようになり、自分自身も弟に対するあたりが強くなってしまったことを覚えています。「学校で話しかけないで」「なんで普通にしてくれないの?」と毎日のように弟に言ったこと、「弟と同じ学校に行きたくない」と両親を困らせたことを後悔しています。

す。障がいがあるため、「普通」にできないことを頭でわかっていても、私の気持ちも知らずマイペースに過ごす弟にイライラしてたくさんひどいことを言ってしまうました。それでも、弟がいじめられて泣いて帰ってくれば、私の弟が傷つけられたことに腹が立ちました。そして、泣いている弟の姿を見て、私よりも障がいをもつ本人の方がずっと辛い思いをしているということに気づきました。

弟と過ごしてきて、弟をとおして私はさまざまな障がいをもつ子どもとその家族との繋がりを持つてきました。そこから見えたことは、障がい者に対する世間の理解があまりにも少ないということです。それが健常者と障がい者、その家族との間で一番大きな壁になっていると感じました。

私は今年ボランティアで、弟の通っていた児童発達支援事業所に行きました。ここでは、子どもたちの意思を尊重し、「ダメ」と言わなことがルールでした。園長先生から、最初に次のようなことをお話していただきました。まずは、家庭や幼稚園、保育園などで理解を得られずに辛い思いをしている子どもとお母さんのこと。そして、園を利用するだれもがここに居たいと思う居心地よい場所にしたということ。園の先生方は子どもたちに喜んでもらうことに一生懸命で、歌や楽器や手話などで、全ての人が楽しめるいろいろな工夫をされていました。私は、園の方針とするあたたくて心地のよい場所になっていることに、とても感動しました。

今までの生活や、ボランティアでの経験から、障がい者とその家族が幸せに暮らすためには、まず周りの理解が本当に大切だと感じました。健常者と同じように、それ以上に一生懸命に生きている人たちに對する偏見、差別を何とかしたいと心を動かされ、さらには強い怒りを感じます。私は、障がい者が過ごしやすい社会になるため、健常者との間にある心の壁をなくしていくためのお手伝いをしたいです。そのためにも、私は医療・福祉の分野で働き、障がいの有無にかかわらず、みんなが居心地のよいと思えるあたたくい場所をたくさん増やしていきたいと思えます。